

日本微生物資源学会第18回大会および JSCC 60周年記念シンポジウム報告

日本微生物資源学会長 鈴木健一郎

国際微生物学会議 IUMS2011 Sapporo が2011年9月、札幌で開催された。第1週（6日から10日）にはBAM (Bacteriology and Applied Microbiology) Division と Mycology Division, 第2週（11日から16日）には Virology Division のセッションが開催された。会場は札幌コンベンションセンターと札幌市産業振興センターで、大変広く、余裕のある運営であった。国際微生物学会連合 (International Union of Microbiological Societies, IUMS) の会合として3年に1度開催され、微生物学全分野にわたる国際会議として最も権威のあるもののひとつである。日本では、1990年の大阪以来、21年ぶり3回目の開催であった。IUMS2011 Sapporo については本誌の矢口氏と田中氏による参加報告もご覧ください。

IUMS2011 の日本開催に際し、日本学術会議微生物学研究連絡会に代わる受け入れ母体として日本微生物学連盟が組織された。日本微生物資源学会も、IUMS2011 に積極的に取り組んでいくこととし、連盟に加盟して協力していくことを理事会で決定した。IUMS2011 開催時点では22の微生物学関連学会が連盟の会員となっている。

IUMS は世界微生物株保存連盟 (WFCC) の上位機関である。あいにく、IUMS の定番である「国際原核生物分類委員会 (International Committee on Systematics of the Prokaryotes, ICSP)」、その「裁定委員会 (Judicial Commission)」は開催されなかったが、いくつかの分類小委員会が開催され、基準株の寄託制度や新種記載の最小基準など、われわれにとっても興味深い内容が審議された。IUMS2011 に来日する世界の第一線の微生物学研究者とカルチャーコレクション事業に携わる研究者にJSCCの活動を知ってもらい、交流を深めることはJSCC およびその会員にとって大変意義深いことである。

JSCC は平成23年度の年次大会をIUMS2011において開催することとした。総会とワークショップをJSCCの行事として行い、IUMS と共催のシンポジウムを3つ計画した。通常の年次大会は大会長がホストとして企画などを立てていただいているが、今回はIUMS2011の事務局と会場関係の調整をするとともに、共催シンポジウムは



(左上から) 会場風景, 授賞式, (左下から) シンポジスト Dr. F. Rainey, Dr. H.-P. Klenk, Dr. P. Desmeth, Dr. H. Sugawara, and Dr. I. Okane

IUMS の本部との連絡を取って内容や講演者についての承認を得なければならなかったため、特別な体制としてほぼ理事会直営でセットすることとした。以下に、IUMS2011 における JSCC のイベントの開催結果を報告し、受賞講演、ワークショップ、およびシンポジウムの講演要旨を掲載する。これらの講演のプロシーディングス（JSCC 奨励賞受賞講演を除く）は JSCC 60 周年記念出版として、編集、発行し、会員各位には近々お届けする予定である。Yoon 博士の受賞総説は本誌に掲載されており、またワークショップは例年の実務担当者会議に代わるものと位置づけ、岡根世話人代表と菅原理事にコンビーナーをお願いしたので、別途本誌に掲載されているご両名による開催報告もご参照いただきたい。

IUMS2011 における JSCC 関連行事は、第 1 週の BAM and Mycology Divisions の中で、9 月 7 日に IUMS と共催で 3 つのシンポジウム、8 日に JSCC 単独の行事として総会とワークショップを開催した。総会は JSCC の会議なので日本語で行い、事業と予算について平成 22 年度の事業報告と、23 年度の実施計画を報告し、学会の運営に必要な会員承認をいただいた。総会に続き、IUMS2011 の参加者に JSCC を知ってもらうため、会長である筆者から 60 周年記念として JSCC の今までの簡単な歴史と、現在の活動について英語で紹介した。さらに、3 月には東日本大震災があったことから、JSCC の機関会員が震災で受けた被害と経験、さらにカルチャーコレクションのリスクマネジメントについて、学会のアンケート結果を紹介した。

総会終了後、Yoon 博士の JSCC 奨励賞授賞式と受賞講演が開催された。受賞講演は、'Verrucomicrobia' 門細菌の系統分類学的研究で、以下の要旨と本誌の総説にあるとおりで、東京大学分子細胞生物学研究所において研究されたものである。22 報の第一著者の原著論文を含む多くの論文として発表され、Bergey's manual の執筆にもつながった成果を発表していただいた。

それに引き続きワークショップを開催した。これはカルチャーコレクションの運営にも直接・間接に関連の大きい微生物株に関するデータベースをテーマにしたもので、今年から WFCC のワールドデータセンターを国立遺伝学研究所から継承した中国科学院微生物研究所の馬俊才博士から今後の展望が話された。その他詳細はワークショップ報告をご参照いただきたい。

共催シンポジウムには JSCC にとって重要な視点から 3 つのテーマを選び、それぞれのテーマでまずコンビーナーを決め、座長と講演者を選定して開催した。幅広い微生物資源に対し、改めて表現性状の重要性を見直し、新しいゲノム情報にどのように取り組み、カルチャーコレクションとしてそれらをどう受け止めるかという流れを設定し、3 つのシンポジウムのテーマを、(1) 微生物分類学における表現性状、(2) ゲノミクスと微生物資源、(3) カルチャーコレクションと微生物分類学とした。JSCC のセッションがブリッジという BAM と Mycology の両分野に関わる内容となるように求められていたため、それを考慮し、各シンポジウムで発表の対象として原核生物と真核生物が含まれるように調整した。良い講演に恵まれ、非常に充実した有益なシンポジウムであった。内容の詳細は以下の要旨集をご参照いただきたい。

IUMS2011 は、震災の影響も心配されたが最終的に全体で 65 カ国から 4,800 人が参加し、3,300 の発表があったという。予想以上の成功であったと思う。それには委員長の富田房男先生の献身的なご努力をはじめとする IUMS 国内組織委員会の海外との積極的な連絡と、日本微生物学連盟による国内の会員学会のとりまとめの貢献が大きいと考えられる。アジアをはじめ、海外からも多くの研究者が来日したが、日本国内でも、専門分野が異なる微生物学者が一堂に集まることは滅多にないことであり、研究者間交流でもその成果は大きい。10 日には天皇陛下ご臨席で記念式典が開催され、多くの海外からの参加者が、式典が印象的であったことを述べておられた。

IUMS2011 での JSCC 大会と共催シンポジウムの開催が成功裏に終わることができたことにつきまして、国内組織委員長の富田房男先生のご支援と、日本微生物学連盟理事長の野本明男先生のご配慮に厚く御礼申し上げます。また、大会運営を担当したコングレ（株）の熟練したスタッフの適切かつ迅速な処理にも感謝します。そして、最後にタイムリーかつ興味深い講演をいただいたスピーカーの皆様にも厚く御礼申し上げます。

関連サイト：IUMS2011：<http://www.congre.co.jp/iums2011sapporo/index.html>

日本微生物学連盟：<http://fmsj.umin.jp/index.html>